

15	豊川	豊川市立御津中学校	ヒラヤマ リエ ----- 平山 理恵
分科会番号		8	分科会名
			音楽教育

研究題目

研究主題：曲の特徴を感じ取り、その魅力を味わう鑑賞指導の工夫

～楽曲の構造と表現を結びつける対話的な学びと ICT・視覚的支援の活用を通して～

研究要項

1. はじめに

(1) 生徒の実際と課題

中学校第1学年における音楽科の学習において、生徒は音楽活動全般に高い意欲を示し、多様な楽曲に対して関心を持って鑑賞に取り組むことができる。しかしながら、これまでの学習体験においては、音色や旋律、和音、構造といった音楽を構成する要素に着目して楽曲の曲想を感じ取ったり、その感じ取ったことの根拠を明確にして自分の考えを言語化・記述したりする機会が十分に確保されていなかった。

本学級（第1学年3組）の生徒の様子を分析すると、楽譜に記された音楽記号と曲想や歌詞（ソネット等）の内容とを関連付けて感覚的に捉えることができる生徒が存在する一方で、多くの生徒は聴き取った音楽記号を表面的に解釈するにとどまっていた。例えば、強弱記号である *f*（フォルテ）や *p*（ピアノ）の指示を、単なる「音量の大小・物理的な音の変化」としてのみ捉えてしまい、それが表現する感情の高まりや登場人物の心理的距離感、背景にある情景の描写といった「音楽表現の豊かさや奥深さ」にまで思考を深められないという課題が見られた。

(2) 主題設定の意図と目指す生徒像

生徒が音楽の真の魅力を味わうためには、提示された楽曲を受動的に聴くだけの鑑賞から脱却し、楽曲の構造（音階、音域、強弱、音色、リズム、和音、転調等）がどのような効果を生み出しているのかを能動的に探究する学習プロセスが必要である。

楽曲の構造を理解した上で能動的に音楽を聴く活動を積み重ねれば、生徒は自分なりに音楽に対する思いや考えを深め、音楽表現の豊かさを多角的に実感できるようになると考えた。さらに、鑑賞を通して得た気づきや感性を仲間と語り合う「対話的な学び」を取り入れることで、自分とは異なる視点や感じ方に触れ、感性を相互に高め合うことができる。

こうした体験を通して、生徒が将来にわたり多様な音楽に親しみ、自らの生活を明るく豊かなものにしようとする態度（学びに向かう力・人間性等）を養うことを目指し、本研究主題を設定した。

2. 研究の構想

（1）めざす子どもの姿

多様な音楽に親しみ、自らの生活を明るく豊かなものにしようとする態度（学びに向かう力・人間性等）を養う

（2）研究の仮説

仮説 楽曲の構造（音階・音域・強弱・音色等）と背景にある歌詞や物語（ソネット）との関わりについて理解を深めさせる指導法を構築し、1人1台端末（タブレット）を用いた「個別最適な鑑賞環境」と、観点を明確にした「協働的な対話（グループワーク）」や「視覚的・聴覚的支援（ヒントカード・実演）」を効果的に組み合わせれば、生徒は音楽の特徴を多角的に捉え、表現の工夫や登場人物の心情を深く鑑賞することができ、主体的に音楽を味わおうとする態度を養うことができるであろう。

（3）研究の具体的な手立て

研究仮説を検証するため、単元全体の構想および本時（第4時）の展開において、以下の4つの具体的な手立てを計画・実施した。

手立て①：1人1台端末（タブレット・イヤホン）を活用した個別最適化された鑑賞環境の構築

一斉での楽曲試聴のみでは、他者の発言や周囲の雰囲気の流れに流され、個人の感覚や思考が十分に形成されないおそれがある。そこで、生徒全員にタブレットとイヤホンを活用させ、自らのペースで気になる箇所を何度でも聴き直すことができる「個別試聴の時間」を設定した。これにより、個々の生徒が集中して音色や旋律の動き、伴奏の変化といった細部の「音楽的根拠」に耳を澄ませ、自分の力で意見を形成できるようにした。

手立て②：視点を絞り込んだワークシートと「ジグソー的対話活動」の設定

鑑賞における思考が拡散しないよう、本時「魔王」においては、「父」「子」「魔王」「伴奏」という4つの観点（パート・要素）を明示して鑑賞を行わせた。さらに、個人で整理した気づきを持ち寄り、3～4人グループで意見交換を行うとともに、グループの組み合わせを組み替える「対話の工夫」を取り入れた。これにより、自身が担当・注力した観点以外の視点（例：子の歌い方と伴奏の激しさの関係など）にも自然と目が向き、楽曲全体を多角的に捉える協働的な学びを実現した。

手立て③：思考を深める「ヒントカード（部分楽譜）」による段階的支援

音楽的な印象や感情（「怖い」「焦っている」など）を抱いても、それをどのような音楽的要素（「音程が上がっている」「強弱が変化している」など）に裏打ちされているか言語化することに困難を感じる生徒・グループが存在する。そうしたグループに対しては、該当場面の楽譜（音符の高低や強弱記号、歌詞が明記された部分楽譜）を「ヒントカード」として提示した。視覚的な楽譜情報と聴覚的な音情報を結びつけさせることで、根拠のある対話へと導く支援を行った。

手立て④：教師による「ピアノ実演」と「拡大楽譜」を活用した概念形成

生徒同士の対話で出された直感的な印象や気づきを、確かな「音楽的構造の理解」へと高めるため、授業の終盤にクラス全体で共有する場面を設定した。教師が黒板に提示した「拡大楽譜」に生徒の気づきを視覚的にまとめつつ、重要なメロディー、和音の移り変わり、音域の変化、転調の箇所をピアノで実際に演奏して聴かせた。耳で聴いた効果と楽譜の構造が一体となって生徒に伝わるよう工夫した。

3. 研究の実際（第4時「魔王」の実践）

（1）本時の目標と評価規準

・本時の目標：音楽の特徴について仲間と話し合うことで、登場人物と音楽の関わりを感じて鑑賞しようとする。【主体的に学習に取り組む態度】

・評価規準：音楽の特徴について仲間と話し合うことで、登場人物と音楽の関わりを感じて鑑賞しようとすることができたか。（発言内容・学習ワークシート等により評価）

（2）授業の展開と生徒の具体的な様子

① 導入（前時の振り返りと学習課題の共有）

授業の冒頭、前時（第3時）で学習した作曲家シューベルトの人物像や、楽曲「魔王」の基本的なストーリー（夜の風の中、馬を走らせる父と、抱きかかえられた病気の子、そして子にしか聞こえない魔王の囁き）を確認した。教師が「この曲はたった一人の歌手が歌っていますが、なぜ聴き手は4人の登場人物をはっきりと区別して感じ取ることができるのでしょうか」と投げかけることで、生徒は本時の探究課題である「音楽の構造と登場人物の表現の秘密」へと意識を向けた。

② 展開1：1人1台端末を用いた個別鑑賞（観点別試聴）

生徒はタブレットに配信された音源をイヤホンで聴きながら、「父」「子」「魔王」「伴奏」という4つの観点に沿ってワークシートに自身の気づきを整理した。イヤホンを使用することで、周りの意見に惑わされることなく、細かな音の変化に耳を澄ませる姿が見られた。



・【生徒のワークシートの記述】

父：音が低くて太い感じ。子供を安心させようと落ち着いて歌っている。

子：声が高くて叫んでいるよう。同じ言葉でも、あとの方になると声がさらに高くなっていて必死さが伝わる。

魔王：最初は声が優しくて、メロディーも楽しそう。でも最後だけ急に強くなって怖い声に変わる。

伴奏：ピアノの連打がすごく速くて激しい。馬が必死に疾走している様子や、緊迫した夜の天気の様子が想像できる。魔王のところで明るくなる。

③ 展開2：対話的学び（グループワークとメンバーチェンジ）

個人での試聴後、3～4人のグループを形成し、各自が捉えた印象や根拠を持ち寄って話し合った。さらに教師の促しによりメンバーの組み合わせを変更（グループのシャッフル）し、より多様な捉え方に触れさせた。

対話の途中で、「なぜ子供の声は印象が変わるのか」「魔王はなぜ不気味なのか」といった言語化に悩むグループに対し、教師は「ヒントカード（部分楽譜）」を提示した。生徒はヒントカードに記された音符の高低差や強弱記号（p や f）、歌詞の指示を目で追いながら、「あ！『お父さん！お父さん！』と繰り返すた



付箋に意見を書き、話し合う様子

びに、楽譜の音符が半音ずつ上がっている！だからだんだん必死さが増して聴こえるんだ」「魔王は最初は甘い言葉だから『弱く（p）』歌っているけれど、連れて行こうとする最後だけ『強く（f）』変化しているから、本性を現した怖さがあるんだ」

「伴奏の（p p p）ピアノニッシッシモは初めて見た。すごく優しく弾いている」といった、音楽的根拠と結びついた発見を次々と口にするようになった。

D 伴奏	
作曲者が工夫している点	1 最初は、柔らかなリズムだった。
	2 途中からは、1拍おきうなりリズムになった。
	3 魔王のときは3拍で明るくなる。
	4 音の強いところと弱いところを1拍おきで変えている。
	5 同じリズムなのに、強さや弱さで変わる。

伴奏担当生徒のワークシート

④ 展開 3：全体共有と教師による実演・概念化

グループ対話で深まった意見をクラス全体で共有した。黒板に掲示された拡大楽譜に、生徒から出された気づき（音域の高低、強弱の変化、伴奏のリズム等）を書き込んで視覚化した。

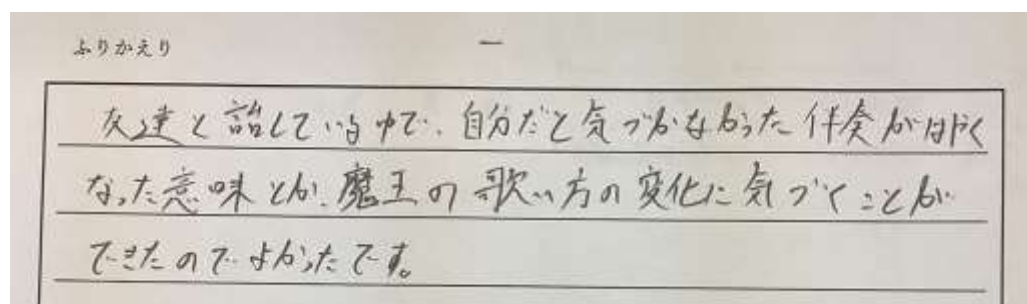
続いて教師は、生徒の発言の裏付けとして、実際のピアノを用いて以下の実演を行った。

1. 「子」の叫びのフレーズ：音階が半音ずつ上昇していく旋律をピアノで弾き比べ、緊張感の高まりを聴かせた。
2. 「魔王」の伴奏と旋律の変化：長調（明るく親しみやすい旋律）から短調（不穏な旋律）へと変化する場面を実演し、曲想の転換を耳で確認させた。
3. 「伴奏」の三連音符の連打：低音の旋律と組み合わせることで、馬の蹄の音と緊張感が表現されていることを実感させた。

生徒は自ら見つけた気づきが、シューベルトの精巧な作曲技術（音楽的構造）によって意図的に生み出されたものであることを深く理解し、感嘆の声を上げていた。

⑤ 終末：学習の振り返りと評価

本時の学びを通して感じたことや、シューベルトの工夫について個人の振り返りを記述させた。



【生徒の振り返りの記述】

「ただ『怖い曲だな』と思って聴いていたけれど、音程の上がり下がりや転調、強弱の変化を使って登場人物の心情や場面の变化を細かく表していることが分かり、シューベルトの工夫のすごさに感動した。」

「友達と話し合う中で、自分では気づかなかった伴奏の連打の意味や魔王の歌い方の変化に気づくことができた。楽譜と音を照らし合わせると、音楽の印象がガラッと変わっておもしろかった。」

「言葉の意味だけでなく、音がどう動いているかに注目すると曲の魅力を深く感じられることが分かった。他のクラシック曲や日本の曲でも工夫を探してみたい。」

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 音楽的構造と曲想を結びつける鑑賞能力の向上

本時において、「印象」という感覚的な捉えにとどまらず、タブレットでの集中試聴やヒントカード（楽譜）の活用、教師の実演を通じることで、「音域の上昇」「強弱記号の急変」「和音・転調」といった具体の音楽的構造を根拠として曲想を捉える力が着実に向上した。

② 対話を通じた主体的な鑑賞態度の変容

観点を絞ったグループワークおよびメンバーチェンジにより、すべての生徒が自分の役割や意見を持って協働的な対話に参加することができた。他者の意見を聴くことで自身の鑑賞を深め、より能動的に音楽の魅力や表現の工夫を探究しようとする「主体的に学習に取り組む態度」が顕著に見られた。

③ ICTとアナログ支援の相乗効果

1人1台端末による個別試聴で個人の思考を確実に形成した上で、紙のヒントカードや黒板の拡大楽譜、教師のピアノ実演というアナログかつ身体的な支援を組み合わせることが、生徒の感覚と論理的な理解を密接に結びつける上で非常に有効に機能した。

(2) 今後の課題と展望

① 他の教材への思考・判断の汎用化

本時「魔王」で培った「構造と表現を結びつけて鑑賞する視点」を、第5時以降の「平調 越天楽」や「箏曲 六段の調」といった和楽器・伝統音楽の鑑賞学習にどのように滑らかに接続・応用させていくかが今後の課題である。和楽器特有の「間」や「音色」「奏法（引き色など）」の工夫に対しても、生徒自らが構造的視点を持ってアプローチできるよう、発問や比較の仕方をさらに吟味していく必要がある。

② 表現活動（歌唱・器楽）への還元

鑑賞の学習で培った「音楽の構造を感じ取り、表現の工夫を見出す感性」を、単に鑑賞領域の中だけで終わらせるのではなく、歌唱や器楽といった表現領域の活動（自らの歌声や演奏に強弱・情調を込める活動）へといかに還元していくか、指導計画の一貫性を高めていくことが今後の検討課題である。